

令和5年度 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング実施報告書

1 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング開催実績

第1回 令和5年6月19日

第2回 令和5年8月23日

第3回 令和5年11月2日

第4回 令和6年1月31日

第5回 令和6年3月18日

2 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキングメンバー（敬称略）

ワーキング長	土屋 隆裕
ワーキング長補佐	中條 祐介
国際教養学部	鈴木 伸治、阿内 春生、中西 正彦
国際商学部	大澤 正俊、白石 小百合
理学部	横山 崇、大関 泰裕、北 幸海
データサイエンス学部	山崎 眞見、土屋 隆裕
事務局	小林学務・教務部長、渡邊教育推進課長、大磯学術企画担当係長、植松学長室担当係長、毛利学術企画担当、佐々木学術企画担当

令和5年度 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング分析結果

1. 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

<取組概要>

平成30年度より「新入生アンケート（入学時実施）」、「カリキュラム評価アンケート（卒業時実施）」、「卒業生アンケート（卒後3年に実施）」の3つのアンケートに、本学の教育ポリシーに関する共通の設問※を設定し、回答結果の分析を行った。分析結果は各種会議で報告を行い、カリキュラム改善の検討を支援した。

また、分析を開始した平成30年度の新入生がすでに卒業しているため、新入生アンケート、カリキュラム評価アンケートの対象者を揃えたクロス集計を行い、経年での変化を分析した。

※「課題発見・問題解決力」「グローバルな視野」「豊かな教養」「確かな専門性」

(分析内容)

- (1) 各アンケートをつないだ経時分析
- (2) 平成30年度、令和元年度新入生の入学時、卒業時アンケートのクロス集計

<分析結果>

- (1) 本学が掲げる教育理念について、これまで入学時には期待値が高いものの、卒業時、卒後3年と徐々に下がっていく傾向が見られたが、今年度は卒業時、卒後3年の数値が同等もしくは卒後3年の数値が上回る項目もあり、本学での学修が実社会で活かされていることが伺える。

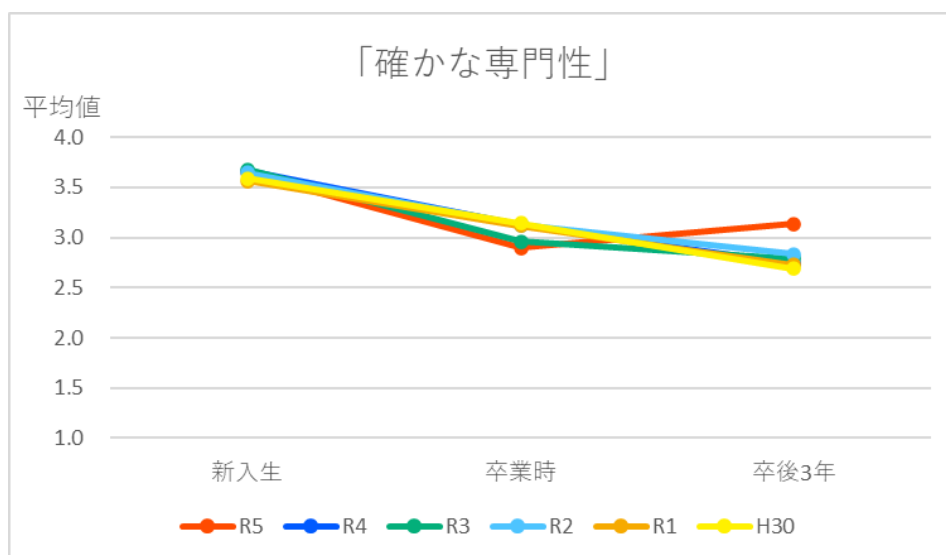


図1)「確かな専門性」の経年比較

- (2) 本学が特に重視する教育理念のうち、「グローバルな視野」について、入学時の期待値から卒業時に「身に付いた」と感じる学生が低下していることがわか

った。今回の対象学年は大学生活の途中から新型コロナウイルスの影響を受け、海外留学や海外インターンシップ等の海外経験を希望しても叶わなかった経緯があるものの、期待値を上回らなかった要因をさらに検証し、対応策を検討する。

グローバルな視野 入学年度		4 期待しない	3 あまり 期待しない	2 まあ 期待する	1 期待する	合計
H30	(1) とても身に付いた			11.5%	27.5%	126.0
	(2) 多少身に付いた	50.0%	50.0%	51.0%	42.6%	233.0
	(3) あまり身に付かなかった		20.0%	31.3%	25.1%	137.0
	(4) ほとんど身に付かなかった	50.0%	30.0%	6.3%	4.8%	30.0
	小計	2.0	10.0	96.0	418.0	526.0
R1	(1) とても身に付いた		5.9%	12.4%	28.4%	137.0
	(2) 多少身に付いた		17.6%	49.6%	42.8%	243.0
	(3) あまり身に付かなかった	50.0%	64.7%	32.7%	23.5%	150.0
	(4) ほとんど身に付かなかった	50.0%	11.8%	5.3%	5.3%	32.0
	小計	2.0	17.0	113.0	430.0	562.0
合計		4.0	27.0	209.0	848.0	1,088.0

図 2) H30・R1 年度入学性の入学・卒業の比較

2. 教学 IR 検討 WG における認証評価に向けた対応

<取組概要>

教育の質の保証を行うために、特に重要項目と考える 3 つの観点について、検討を進めた。教学 IR 検討 WG にて分析した結果を各学部会議で報告・共有し、学部独自の課題の洗い出し、改善に向けた検討が進められた。

<教学 IR 検討 WG で取り組む 3 つの観点>

- (1) 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」
- (2) 「成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることの組織的確認」
- (3) 学修成果の可視化

(分析内容)

(1)-1 授業外学修時間の推移

※授業評価アンケートにおける授業外学修時間の設問について、以下 6 段階の回答割合を集計分析

- ⑥ 4 時間以上、⑤ 3 時間以上 4 時間未満、④ 2 時間以上 3 時間未満、
- ③ 1 時間以上 2 時間未満、② 1 時間未満、① ほとんどしなかった

(1)-2 授業外学修時間が多い科目の特徴分析

(2) 令和 5 年度科目における成績評価に関する分析

(3) 【YCU-Board ポートフォリオ機能】YCU 指標を用いた試行的な分析

<分析結果>

(1)-1 大学設置基準の単位に関する条文「1 単位の授業科目を 45 時間の学習を必要と

する内容をもって構成すること」を踏まえ、正規の授業時間に加えて、学生の授業外学修時間数の確認を行った。

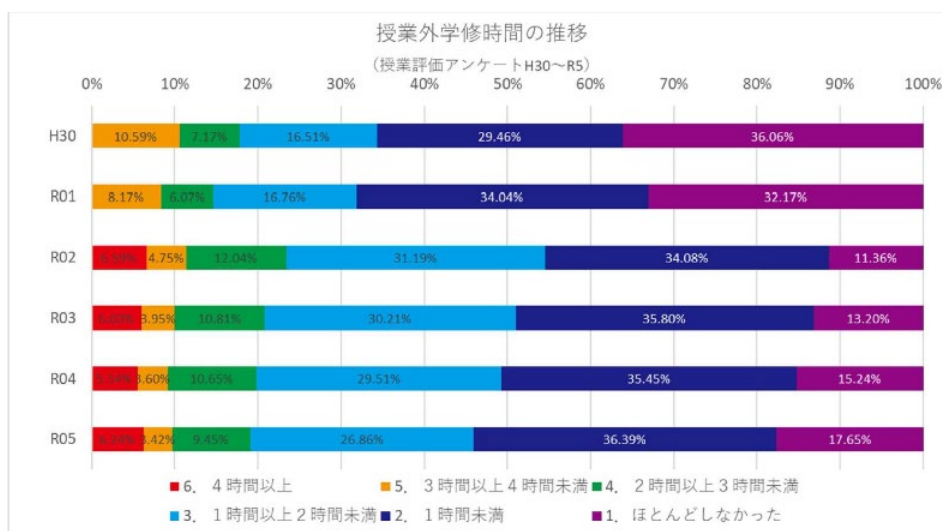


図3) 授業外学修時間の推移

令和元年度から令和2年度にかけて、「③1時間以上2時間未満」の回答割合が大きく増えていることで、授業外学修時間全体が増えており、令和5年度についても令和2年度と同様の傾向であった。しかし、令和2年度をピークに徐々に減少傾向ではあり、「②1時間未満」、「①ほとんどしなかった」の回答割合が増えていることが確認できた。(令和2年度比8.6%増)

- (1)-2 授業外学修時間の高かった科目のシラバス・YCU-Boardの記載内容、授業評価アンケートの学生からの自由記述の内容から、共通事項を分析した。授業の性質によっては全てを導入することは難しいが、参考事例として共有を行った。

【授業外学修時間が長い科目の特徴(一例)】

- ・ディスカッションや発表の機会がある。
- ・講義期間の途中で複数回課題・レポート提出がある。
- ・教員からのフィードバックがあり、進捗状況や悩んでいる部分を相談しながら進めることができる。

- (2) 令和5年度の成績評価結果を分析し、成績評価が適切に行われているか確認を行った。

- ・分野別にGPA平均値を集計し、GPA平均値が高すぎるまたは低すぎる分野・科目の確認を各学部で行った。
- ・成績登録者数によって平均値に差が見られることから、成績登録者数とGPA平均値を散布図にまとめ、評価が偏っている科目の確認を各学部で行った。
- ・各学期の集計結果だけでなく、経年変化の集計を詳細に行い、継続して成績評価が適切に実施できているか確認できるようにした。

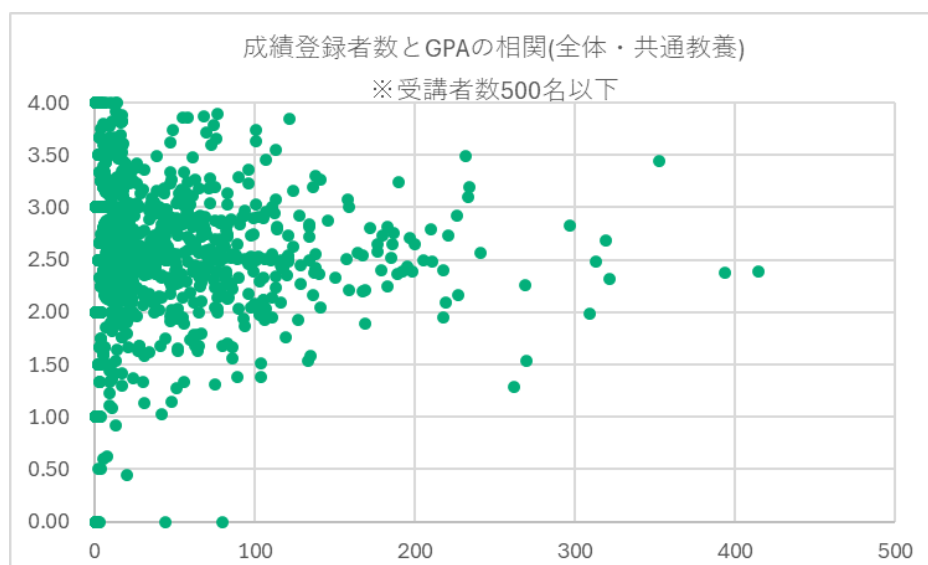


図 4) 成績登録者数と GPA 相関（共通教養科目）

(3) 令和 4 年度から導入した LMS（YCU-Board）ポートフォリオ機能「YCU 指標※」を用いた学修成果の分析について、以下 2 つの分析を昨年度から継続して試行的に実施した。

a 入試区分と YCU 指標（学修成果）の相関分析

b 留学経験と YCU 指標（学修成果）の相関分析

a、b ともに令和 4 年度 4 年次生の学修成果との掛け合わせを行い分析した。a では、推薦型選抜の学生、b では留学経験が有る学生の学修成果が高い傾向にあり、今後は該当区分の学生の志向や特徴の分析を進めていく。



図 6) 入試区分による YCU 指標への影響

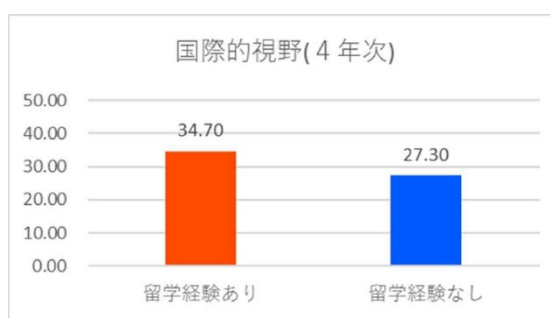


図 7) 留学経験による YCU 指標への影響

また、同様に以下の分析について、令和 5 年度新たに試行的に実施した。

c. 令和 4 年度卒業生の就職業種と学修成果項目の相関分析

結果として、不動産業、地方公務に関する業種に就職した学生は地域貢献の数値が高い等の傾向が一部で見られたが、対象データが少なく断定できる状況にはないため、来年度以降引き続き集計を行い、検証を進める。

※ディプロマポリシー等、卒業までに身に付けておくべき能力から設定した指標であり、履修科目と成績評価に応じて積算。「論理的思考」「情報リテラシー」「国際的視野」「資料作成力、プレゼンテーション」「地域貢献」「学部独自項目」

3. 全国学生調査の実施及び分析

<取組概要>

全国学生調査は令和元年度から令和4年度までの計3回、試行で実施されており、令和5年度は令和4年度調査結果の集計・分析を行い、分析結果から本学の教育における課題点を洗い出し、課題改善のためのFD・SD研修会の実施を依頼した。また、来年度実施予定の第4回試行実施に向けて、実施方式・設問の検討を行った。

(取組内容)

- ・令和4年度全国学生調査（第3回試行実施）結果の集計・分析
- ・令和6年度全国学生調査（第4回試行実施）に向けた検討

<分析結果>

大学での経験や知識・能力の獲得についての設問35項目のうち27項目で全国平均を上回った。また、生活時間に関する設問6項目について、卒業論文にかける時間数平均が全国平均を上回った一方で、授業への出席、授業外学修時間、自主学習の時間数は全国平均を下回った。

また、下記3項目については、前回調査と同様に全国平均を下回ったため、全学的な課題として取り上げた。

- ・「項目6：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」

全国平均：2.6、本学平均：2.5

- ・「項目9：ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」

全国平均：2.5、本学平均：2.4

- ・「項目15：インターンシップ（5日間以上）」（満足度）

全国平均：3.2、本学平均：3.1

※インターンシップ未経験の割合 全国平均：80.7%、本学平均：80.9%

4. 分析結果の報告

各分析結果について各種会議にて報告・共有し、各学部におけるカリキュラム等の検証や改善を支援した。

<報告・共有した会議体>

- ・教育研究審議会（令和4年度全国学生調査（第3回試行実施）分析結果）（年1回）
- ・学長諮問会議（年1回）
- ・高等教育推進センター教学IR部門会議（年3回）
- ・各学部教授会（適宜）
- ・ICT推進委員会（年2回 ※データ活用推進部会として報告）

5. 今後の課題

(1) 学生から回答を求めるデータ(各種アンケート、目標設定等)の回答率について

授業評価アンケートや YCU-Board の目標設定等、学生に回答・記入を依頼する調査等の回答率が低い状況にあり、データの信頼性の担保や目的の達成に向けて影響が出ている。(カリキュラム評価アンケートや新入生アンケート等、回答率が 80%を超えるアンケートもある。)

アンケートを周知する際に、学生にその意義を十分に伝えとともに、アンケート結果のフィードバックを十分に行う等、回答者の該当調査への理解が深まるよう、引き続き検討を進める。

【回答率が高い調査等】

- ・カリキュラム評価アンケート：90.59%
- ・新入生アンケート：95.20%

【回答率が低い調査等】

- ・卒業生アンケート(卒後3年の卒業生が対象)：22.6%(前回 22.8%)
- ・国際総合科学群令和5年度授業評価アンケート：前期：27.3%、後期：約20%
- ・YCU-Board 目標設定：前期：28.6%、後期：10.2%(3月14日時点)

(2) 学内収集データの把握、取得データの整理について

本学で実施しているアンケートは業務の必要性に基づいて各部署で実施されており、学生から取得しているデータの全体像が十分に把握されていない。また、取得データの内容が統一されておらず、他部署で実施しているアンケート同士を紐づけて相関や影響を分析することが円滑に進まない状況になっている。

各部署が実施するアンケートや保持している情報の把握を進めるとともに、データの統一ルールを定め、相互に活用できるよう整理を図る。

また、データの保管先が分かれており、必要な時に必要なデータを活用することが難しい状況であることから、ICT推進担当と連携し、各種アンケートのデータベース化を検討する。

(3) 各学部の自己点検評価と教学 IR の連動について

各学部で実施する自己点検評価の取組と教学 IR の取組の連携が十分にできていない。今後は、自己点検シートに記載された教学面での課題を年度当初のワーキングにて確認するとともに、目標達成に向けた取り組みを教学 IR 検討ワーキング内で継続的に実施する。

6. 令和6年度の方針について

これまでの取組は令和6年度以降も継続し、新たにアンケート結果の詳細分析や分析結果を踏まえた対応を進めることを検討している。

また、第4期中期計画では、「教学 IR と連動した FD・SD 研修会の実施」が明記されているため、FD・SD 部門とも連携し、学内のニーズに沿った FD・SD 研修会の企画・検討を進める。